

思わぬ贈り物

教室配置に関して

2020.01.17

No.87

校長 渡邊 幸二

エアコン工事では、先生方にご迷惑をおかけしています。先日、亀ヶ崎小の校長先生と話したら、そこは空き教室がなく、エアコン工事のための教室移動がものすごく面倒というか、こまごまとしているという話でした。その点、浜田小は大きく3回の移動で済みそうでありがたいです。今、1階教室の天井には、正方形の大きな穴が開けられ、そこから2階の床の根太部分が見えていました。

思わぬ贈り物

現在、浜田小学校は、子どもたち全てが2階で暮らしています。移動初日は、何か斬新な感覚なのか、移動した子どもたちも、そうでない子どもたちも、その新しい雰囲気を楽しんでいるようでした。そして、この移動は、私たちに思わぬ贈り物をくれました。

今、2階部分で空いている教室は、中学年棟の一番奥(物置)と、4年と3年の間だけです。高学年棟の5つの教室は全て埋まっています。すると、やはり隣にいる学年に互いに気を遣うようでした。つまり、「他者意識」が芽生えたのです。“思わぬ贈り物”とは、この環境が他者意識を持つようにしてくれたことです。

先入観、前例踏襲を克服する

私たちは、というか私自身ですが、どこかで「1階は低学年」、「ここは中学年棟」というように、そして「教室配置は静かな環境を考えて、空き教室を間に入れる」など、そんな先入観を持っていたように思います。「ここは1年教室!」というような前例踏襲の考えも、自分で気づかないうちに刷り込んでいたのでしょう。本当は、教室配置だって、教育課題に合わせてもっと自由であっていいのに、どこか前例踏襲、先入観に縛られていたように思うのです。

もしかすると2年生は、ある意味、良い表現ではありませんが、隔離病棟のようになってはいやしなかったか…そんなふうに思うのです。玄関からも職員室からも遠く離れ、隣の1年生とも離され、「騒いでも大丈夫」「何をやっても気づかれない」…そんな場所に彼らを追い込んでいたのでは…そんな環境を設定していたのは、先入観等々がちがちな頭になっていた私自身だったのではないかと考えさせられたのです。

今、2年生は、教室で活動するにもトイレに行くにも、隣の特別支援学級の子どもたちにも、6年生や5年生にも気を遣わなければなりません。先生が「静かに!」なんて何度も注意する必要もないのではないかと思います。つまり、他者を意識できる環境設定であるということです。

本校の子どもたちの課題である「他者意識の醸成」は、案外簡単などころにその解決の糸口が転がっているのかもしれませんが、それを阻んでいるのが、私たちが持っている先入観や前例踏襲という思考だとしたら、そんなものはさっさとぶっ飛ばしてしまいたいですね。